

下町から発信するワーグナーシリーズ、躍進中!

ワーグナー音楽祭「あらかわバイロイト」特別演奏会 プッチーニ&ワーグナー・ガラコンサート

ワーグナーといえは、今、「あらかわ」が熱いのはご存知でしょうか。

一昨年、東京国際芸術協会が、ワーグナー音楽祭「あらかわバイロイト」を立ち上げ、荒川区にあるサンパール荒川大ホールを使用し、09年1月の「パルシフアル」ガラコンサートを契機に、原語での全幕上演においては、5月の「パルシフアル」・10年4月の「ワルキューレ」を成功裡に公演しました。また特別公演としては、09年10月の「タンホイザー」「ワルキューレ」からの抜粋を中心とするオーケストラのガラ公演を開催。いずれも、業界の大きな話題となりました。

今年10月にも「あらかわバイロイト」特別公演が開催されることになり、主催となる東京国際芸術協会において、指揮者の佐々木修氏に公演の見どころ・聴きどころをお聞きしました。

話題のソリストたち

——歌手によっては、イタリアものを得意とする方・ドイツものを得意とする方、がいらっしやると聞いたことがあります、イタリアものとドイツものを同じ歌手が歌うということに驚いています。

佐々木修氏（以下、佐々木） 歌手にとってプッチーニとワーグナーは永遠のテーマです。しかし、この二人の大作曲家を一晚で歌い分けるといふことは、おそらくこれまで日本人ではだれも挑戦してきませんでした、いえ出来ないことでした。それだけにプッチーニとワーグナーを一晚で舞台上に乗せる今回のガラコンサートは、オペラファンにとっては興味尽きないものとなるでしょう。

——テノールの角田和弘氏は、国立音楽大学准教授、群馬オペラ協会の会長など要職にも携わる傍ら、藤原歌劇団の看板テノールとして、これまでイタリアものを中心に歌われてきたという印象ですが。
佐々木 角田和弘氏はドイツものとしては、今年5月のあらかわバイロイト「ワルキューレ」公演では、ジークムント役に初めてワーグナーに挑戦し、絶賛を博しました。ご本人の言葉としては『や

る前はこんな大変なオペラ、二度とやりたくないと思っていました、歌い切った今は、新たなワーグナーにチャレンジしてみたいと思えるほど、ワーグナーのとりこ、ワーグナーの魅力にはまっています。』とおっしゃっています。

——ワーグナーの音楽は、聴く側だけではなく、演じる側にとっても、とりこになってしまう魅力を持つているということですね。ワーグナーのとりことなった角田和弘氏が今後どのようにワーグナーを歌っていかれるか、楽しみですね。もうお一人の福田祥子氏は、どのような方でしょうか。

佐々木 ソプラノの福田祥子氏は、一般にはまだ無名ですが、日本人離れした容姿とピュアーな声は、音楽業界では早くから注目された存在でした。今年5月のあらかわバイロイト「ワルキューレ」公演では初日のブリュンヒルデ役でデビューし、話題をさらいました。この公演の2日目、3日目を指揮したドイツ人のクリスチャン・ハンマーは『本場ドイツでも通用する一級の声』と賛辞しています。また音楽ジャーナリストの寺西肇氏は、『このステージが、日本では稀有な本格的ワーグナー歌手を誕生させることになったかもしれない。』とおっしゃっています。

——日本にはワーグナー歌手が少ないと言われていますが、福田祥子氏のような新しい芽が育っていることは、日本の音楽界にとって喜ばしいことです。

あらかわバイロイト

——佐々木氏が携わっていらっしやる「あらかわバイロイト」とは、どのように音楽界に波及効果があるのでしょうか。

佐々木 今年の10月24日札幌コンサートホールKitaraにおける「トヨタコミュニティコンサート」で、オールワーグナープロの演奏会が催されますが、この二人を含めた、いずれもあらかわバイロイト「ワルキューレ」のソリストが歌う公演となります。これは、これまで日本での

ワーグナー公演のほぼ全てを担ってきた二期会でさえ、ワーグナーは数年に一度取り上げる程度であったことと考えると、あらかわバイロイトが、ワーグナー歌手の鍛錬場、教育機関として日本の音楽界に重要なポジションを示していると言えるでしょう。

——「あらかわバイロイト」は2011年1月ワーグナーの弟子のフンパーディングが作曲した「ヘンゼルとグレーテル」公演、2011年秋に予定されているワーグナーの「神々の黄昏」公演、と活動を続けていくようです。全国からワーグナー・ファンを集めるこの音楽祭は、これからも多くの注目が集まることでしょうか。



今回、インタビューにお答えいただいた指揮者の佐々木修氏は、カラヤン国際指揮者コンクールの入賞歴（1979年）があり、カラヤンやチェリビダッケといった巨匠に師事しました。またヨーロッパ名門の音楽大学の一つ、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学オーケストラの指揮者・講師もつとめたほどの経歴がありながら、帰国後、その才能はむしろ音楽以外の分野に輝いてきました。氏が1999年、当時imodeの出現に湧く携帯コンテンツ業界に提案したいいくつかのビジネスモデルは、秒進日歩といわれるインターネットの世界で、異例のロングスパンのコンテンツとして現在光り輝いています。その一つ「ルナルナ★女性の医学」は、現在180万人を超えるユーザーを抱える業界トップサイトです。また『モバイル音楽辞典』は、たとえばオペラのあらすじだけでも2010年7月現在、283作品を収録するなど圧倒的な情報量で高い評価を得ています。偶然ですがimodeの出現と同じ1999年、産経新聞に佐々木の活躍が掲載されましたが、その中で佐々木氏は『音楽を含む芸術こそが、デジタル時代の次の産業になります。物や価値観、法律は時代によって変わりますが、人の感動は次の世代へと受け継がれ永遠の価値となります。この永遠の価値を嗅ぎ分けるのが芸術家の仕事です』と語っています。佐々木氏の活動は、これからも目を離せません。